

勢語臆斷

春其

僧
775
164



明僧
773
卷164

僧契仲著

勢
詠
德
斷

中村直衛寫

中村直衛印

一 此浮瑠璃在東業中約居一生の事とあり

西行法師
山家集

即号名心并他者古来分眼於流形

奥書云古事只仰而可然又云古之人法不可

尋其他者唯可說翻花言葉而已 此句則要

今按此河流流度百餘里藤原忠房約居此也

とある事一也

伊波のりなむとてさきも持さきとてさきも持さきとて

あきひしよりいせ人のむらさきはせよしひさしとて

またもまればちとるあきとてまたもまればちとるあきとて

世にさきひしとてさきひしとてさきひしとてさきひしとて

こまればちとるあきとてまたもまればちとるあきとて

うつゝいひくひらりゝをせり

一 百葉集の前後の序に我々の代志をいへり

一 沙物よりと古今集とを区すあつては勅撰のれい

一 探集抄は古今集のれい書に依りてなり

一 年月法人の友佐おきくは女御の可貴子の四十九日の法事の事なり

一 沙物の物より古今集のれい書に依りてなり

一 古今集の序に河原のありし事とのふり

一 古今集の序に河原のありし事とのふり

一 古今集の序に河原のありし事とのふり

一 三代実録云業平體貌閑雅放縱不拘略無才学善作和歌云々

一 沙物の序に古今集のれい書に依りてなり

一 古今集の序に河原のありし事とのふり

何れに何れも

一上巻に四十八段あり下巻に七十八段あり下人
ちく二百二十の段あり

大正二年二月廿日寄
中村楠雄氏



むし於てさうひわうありさくありの京の人の名を
ふりしうきくありにいふなり

昔はな太古道古といふ色なりわいさうふなり尚書序

に古者伏犧氏之王天下也さうさかたり和漢の古に此

段端の海に珠の沙物さうはははむしさく端成

おこせりたてこはは東平とさくさうのさくこはと

とあり對するほのさうさうひむしむしとこひまめ

ちとむしと男子のいふはつけ女ありさめ成つけさう

子男子通称のなかり

神代紀に少男此云烏茅狐亦女此云烏茅呼て自

ほ成さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

かゝい彼さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

わらけきるほいむらうらうまうのひま

ついらい又ほいかきしりふ 和名云築牆 叔以如岐 豆以法知

字のよきしりふむらうらうまうのひま

常のゆきうまはむらうらうまうのひま

られちりまはむらうらうまうのひま

むらうらうまうのひま

ひまむらうらうまうのひま

かきのくもむらうらうまうのひま

又ついらうらうまうのひま

わらけきるほいむらうらうまうのひま

去の家をむらうらうまうのひま

史記孔子世家云居十月去衛將適陳過匡顔淵

為レ僕以其策指之曰昔吾入此由レ彼缺也琴操云

孔子到匡郭外顔淵舉策指匡穿垣曰往與陽貨

正從此入

枕常子に人よむはむらうらうまうのひま

深氏物語深氏よりむらうらうまうのひま

むらうらうまうのひま

よむらうらうまうのひま

らむらうらうまうのひま

人しげくもむらうらうまうのひま

朝美今なきむらうらうまうのひま

深氏物語深氏よりむらうらうまうのひま

深氏物語深氏よりむらうらうまうのひま

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて 10巻

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

作部集六人

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

詩衛風云言思宿使我心痲 法正集六

女よあまのうきをたはさむいそくしるはに二葉底の
そのうのゆかへ大なる人あはれなる物動も
河のまはりの花よりとて方河保親よりあはれ
又あまの業むの整うあはれ底のけりあなを物
なすうぬもあはれ物動もあはれとてうたへ一等と
海とく捨ねれあはれはものゆき
いせとらつあはれひらうらうらとてあはれはのいそく
うらとて

海つら海きし川つら海つらうらうらひらひら
らく可き川きしうたてうらうらうらうら海きと
海つらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
尾張 須田幸紀、尾張もうらうら尾は平遠と同一

於意飲と別し 於遠集と尾法並をけし

池とらうあはれ水のあはれいひのうらうらあはれあはれ
もよらうのうらうらとてに用の方をあはれあはれなは
集う今の岸の河牛よあはれあはれあはれあはれあはれ
わらうらあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
後撰新藤 平手抄本
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく

岸のいそくいそく 文選張景陽雜詩曰流波密舊
浦行雲思故山此上句のいそくいそくいそくいそく
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
いそくいそくいそくいそくいそくいそくいそくいそく

あはれは故きこころなるあはれこころ ひとり人
のこころ知る人こそその人の心とていふ人なり
二条元元 惟吉の世方ぬしつゝに世にうつらふ
初まを霧旅 平年日記
まらちなるうつらふのうつらふもあはれなる
うつらふのうつらふはこころのうつらふのこころ
あはれなるあはれなるこころなり

五條
昔はこころのこころもあはれなるこころなり
住吉の日記
うつらふのうつらふは昔のうつらふのうつらふは
あはれなるあはれなるこころなり

あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり

あはれなるあはれなるこころなり

ゆき今霧旅

あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり

あはれ集
あはれなるあはれなるこころなり
あはれ集
あはれなるあはれなるこころなり
あはれなるあはれなるこころなり

行々與君生別離ナカフ

じいのおもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
なれどもなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり

お前の花はなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり

おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
中將の葉はなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
なかりけふのこころの中にもおもひはなかり
文級記一向
井基佐所
河東の
東部の
細部の
省きの
とておもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり
おもひはなかりけふのこころの中にもおもひはなかり

天保六乙未年八月廿六日書寫之

中村直道

むしとていあつまへゆふとりの友とらあめーなよ
つひつひいぢまき

ね送報

ねまじ糸糸らよあ介と裁ら海にわらもちん
のここのら人のむしとらーのひとねつひぢまき
はまをねあままりゆらとあ女のりたらひつ
うーとらこのれいま幹がらつひつとらあ
人のむしとあめらたあーと帝のこくねをらよ
あま橋乃ここのらあめらつふと初こらあ
りこらとあねあめね糸糸のやとらたつとらあ
りあもあねとらこ糸糸のやとらあねんた
今ああ戸ああのとらあて人のあらゆくとらあ

あまきつりまもあまのこりや百八の御中あつひの御たまの
有るらしむらみ候るものとてしりり東国の子息も棟梁を
嫡子すたう女の後滋養に二男深敷内侍候とてお物成
と此内侍ありとて後東平の内侍のこもきぬあつひ
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
書の内侍ありとてしりり東国の子息も棟梁を
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして

日平紀よ小の字とてしりり東国の子息も棟梁を
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして

その後とてしりり東国の子息も棟梁を
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして

よの物とてしりり東国の子息も棟梁を
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして
とあまのこりやあれは有常らしむらみかへ程とくして

まづおのゝり枝のさひくひぬはすいせうからさるゝにさうの
しやうしうしうしうしうしうの道なれぬしうしうしうしうと
能くふいふしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
をぬたはらうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
ちうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

教宗总平教后

佐人のつれぬく者いけりし秋のきふそさうの
とせやうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
きうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

なましうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

しうのあうりうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
おしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
あうりうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

おとせしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
の深しうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
年ぬたはらうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
たれ年ぬたはらうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
まがうりうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

ひしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
ちうりうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

かしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
人の名よ賢のまよしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
しうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
しうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう
しうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしうしう

下の白くわさしなすし

心ありしうらもあられあてをんからしきか

日本紀万葉集の何れとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

かりありし

ひしうらもあられとありしうらもあられ

此後仰り物語の業平の河原親を男おれりしうら

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

ち初物語とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

井のほとりしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

とありしうらもあられとありしうらもあられ

沖は白浪のまはるる山とていふも今乃其のつげゆ
も一河とていふもこれ程の今事とていふも
感ずる上二句の序とて下の句の序とていふも
えとていふもあやむれはるる山とていふも
てふ人の上とていふもあやむれはるる山とていふも
とていふもあやむれはるる山とていふも
きりとりり今世とていふもあやむれはるる山とていふも
今の心とていふもあやむれはるる山とていふも
くまへん心とていふもあやむれはるる山とていふも
第三神武紀云皇師勤兵歩赴龍田而其道狹嶮
人不得並行乃還更欲東喻膽駒而入中洲
あまのこ那志とていふもあやむれはるる山とていふも

けいといは沖は白浪のまはるる山とていふも
ぬを人のまはるる山とていふも
ちり山とていふもあやむれはるる山とていふも
拾遺集卷六の家のまはるる山とていふも
くらくらくらくら ちり山とていふも

ぬを人のまはるる山とていふも
新勅撰 新教 不偷盜戒

ちり山とていふもあやむれはるる山とていふも
定家公孫の今事とていふもあやむれはるる山とていふも
ちりて新勅撰とていふもあやむれはるる山とていふも
後漢書云靈帝中平元年張角及皇甫嵩討之
角餘賊在河白波谷為盜時俗號白波賊

三巻のふ二巻居の世後八年に女許のあせりせりまへに
去文女流のいりたり此契ハソのきねりしものはわく
ありん一糸福開は元保祿居四十候といふ乃女流乃
あつまふこと有りこの女許ハ二巻居りされともまに
後居居ハ四十日ハさきを流ハ知りし一花の附あを記乃
契とソハ紅糸の流ありとかりし契とソりりあつけ
ゆハ加つてゆし 白氏文集尚齒會詩後云時
秘書監狄兼謩河南尹盧貞以年未七十雖與
會而不及列 此の與の字は

の字をさす 三巻居りし契は
花ありぬあけまはしとせりまきあつひはる附はり
此のけまハ悲新ありしに嘆歌ありまをけまは悲
嘆めを採嘆めもたれまは息をつけハ長息をつめて

りし詞のまはれあはれとまはれとまはれとまはれとまはれと
いと此のまはりまの世契といひて下ハ東文女流の世と
あまありぬあけまはしとせりまきあつひはる附はり
いとまはしとまはれとまはれとまはれとまはれと
花後てまはりまはれとまはれとまはれとまはれと
世をたけとまはれとまはれとまはれとまはれと
あまのまはれとまはれとまはれとまはれと

ひりしとまはれとまはれとまはれとまはれと
百葉一水端とまはれとまはれとまはれとまはれと
り知まへりし人ありし
まはれとまはれとまはれとまはれとまはれと

新勅撰のついでに心のおもひなりしをいへり
物々ほむのほのうらむに對してついでのおもひ
をいへり

わねのついでに心のおもひなりしをいへり
物々ほむのほのうらむに對してついでのおもひ
をいへり
ついでに心のおもひなりしをいへり
物々ほむのほのうらむに對してついでのおもひ
をいへり

ついでに心のおもひなりしをいへり
物々ほむのほのうらむに對してついでのおもひ
をいへり
ついでに心のおもひなりしをいへり
物々ほむのほのうらむに對してついでのおもひ
をいへり

ついでに心のおもひなりしをいへり
物々ほむのほのうらむに對してついでのおもひ
をいへり

ついでに心のおもひなりしをいへり
物々ほむのほのうらむに對してついでのおもひ
をいへり

古事紀云仁没云故科曙立王令宇氣比白因拜
此大神誠有驗者住是鷺巢池之樹鷺宇宇氣比
給如此詔之時宇氣比死其鷺隨地死亦詔之
宇氣比活今者更活又有餅白檮之前葉廣熊白
檮令宇氣比枯忽令宇氣比生今名賜其曙立王
謂倭者師木登美豊朝倉曙立王登美二
字以音
あまのついでに心のおもひなりしをいへり
物々ほむのほのうらむに對してついでのおもひ
をいへり

うけとけりけりいひてわくやとて
しやまはしりてとてききとていひてわくや
とていひて 普門品乃記四諸毒藥還着於本人といひ
んしおつてとてききとていひてわくや
根とてききとていひてわくや
とりてとてききとていひてわくや
たきとていひてわくや

むりいひてわくやとていひてわくや
いひてわくやとていひてわくや
とていひてわくやとていひてわくや
布の名ありけり古きいひてわくや

舊事紀云彼今倭文造祖天羽槌神織倭文布
者 万葉并三赤人勝鹿真間娘子墓と見てま
るる昔きいひてわくやとていひてわくや
久とあり 同守十一月もいひてわくや
な今ふい
いひてわくやとていひてわくや
又万葉に倭文幣とていひてわくや
とありとありとありとありとありとあり
いひてわくやとていひてわくや
麻環に巻子の布とていひてわくや
下のりといひてわくや

うき世にあひて一町一合とあるは、
とらふにせうけり、
いふに、
あふる、
此國も倭文にあつた布とるを、
あふらうとて、
とらうとれ、
作者の詞あり

いふと、
あふらうとて、
とらうとれ、
作者の詞あり

あふらうとて、
とらうとれ、
作者の詞あり

あふらうとて、
とらうとれ、
作者の詞あり

一がのらあれたしきりる流のその流りもまきく
その流りもあつしきりる流のその流りもまきく

と

次は推志二

ありにほあふらとらとらあに舟き舟のきとまふし
ありにほあふらとらとらあに舟き舟のきとまふし
らああつりとらとらあに舟き舟のきとまふし
らああつりとらとらあに舟き舟のきとまふし
あきん舟のきとまふし

われう人のこまていざやあや

和名集云楊氏漢語抄曰田舎兒和名并奈加比止

女の奇われう人のこまていざやあやとまふし
とまふしとらとらあに舟き舟のきとまふし

しきりる流のその流りもまきく

新物推志二

ありにほあふらとらとらあに舟き舟のきとまふし
ありにほあふらとらとらあに舟き舟のきとまふし
らああつりとらとらあに舟き舟のきとまふし
らああつりとらとらあに舟き舟のきとまふし
あきん舟のきとまふし

ありにほあふらとらとらあに舟き舟のきとまふし
ありにほあふらとらとらあに舟き舟のきとまふし
らああつりとらとらあに舟き舟のきとまふし
らああつりとらとらあに舟き舟のきとまふし
あきん舟のきとまふし

あめのちりりまこのの源のいさこいふ人これ物さるこ
の車と女車とそそらうきとさうくあはれくあひい

文徳実孫三代實孫もよええいり人

源孫天皇源定正三位揚一至 從四位上 一奉 正六位上 順 從五位上 能登守

源氏常本一木柵乃

女のころあ今ひとあきこやんて人のあう

れのうひあひさあこいさあさうもいあういあつく

らひく

本柵よあありはる節のきとけうむいふこのさそき

とあうらたういふいふさうさうさうさう

おのころあうとさうと女の車これうらると車あり

りる人のあうこのあ大あわあういあういあう

あうあうのあうあういあう

車をうらる人のあうあ平のあうあひあう人のあ

あうあうあ大あわあういあうあうあうあうい

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

經に如燭盡燈滅といふ佛乃入滅といふこと
今この乃がれをいふと當乃火の如といへば
して別をもち人の心も亦いむ人の死をいふこと
此をせりて年といふありては世を流るるは
らも入たる世を流るる世を流るるゆへに人の心
まけといふるはきつむるに精舎日記に一月にまけりぬ
十日はうらの世にまけりゆへに人の心もまけりぬ
くして世の人の心もまけりぬといふこと

かいつるべし

いふありては世の人の心もまけりぬといふこと
おの心もまけりぬといふこと
まけりぬといふこと
まけりぬといふこと
まけりぬといふこと

命の火を消すことと云ふは世の人の心もまけりぬといふこと
是則非真滅の心をいふこと王充論衡曰人之死也
猶火之滅火滅而輝不照人死而智不慧
此をいふたの断道二見乃中乃断見一人言常
定るといふ常見ありこれこれ邪見今いふるハ
多しこれこれこれこれこれこれこれこれこれこれ
充よはまきとるはあつちりハ世といふこと
く智といふこといふこといふこといふこと
るハ世といふこといふこといふこといふこと
といふこといふこといふこといふこと
といふこといふこといふこといふこと

とくろり寝るも此物酒の中の大すのねたううか
つる長喃子

信がもて控まきぬあつういふうけうしてあへて
とくろり寝るも此物酒の中の大すのねたううか
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とあつういふうけうしてあへて
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とあつういふうけうしてあへて
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか

とくろり寝るも此物酒の中の大すのねたううか
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とあつういふうけうしてあへて
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか

ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか

とくろり寝るも此物酒の中の大すのねたううか
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とあつういふうけうしてあへて
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とくろり寝るも此物酒の中の大すのねたううか
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とあつういふうけうしてあへて
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか

とくろり寝るも此物酒の中の大すのねたううか
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とあつういふうけうしてあへて
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とくろり寝るも此物酒の中の大すのねたううか
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか
とあつういふうけうしてあへて
ゆりちも此物酒の中の大すのねたううか

とあつてひてまつしつらりきり

巾着とこのころハ納し又男のりりる女

うへのきぬハ和名集云楊氏漢語抄云袍 薄文又和名宇

倍乃岐沼 著禰之袷衣也 一云朝服

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

あつてひてまつしつらりきり

よ内も... 伊勢

とら... 伊勢

監人... 伊勢

名の... 伊勢

あそ... 伊勢

ふく... 伊勢

形... 伊勢

きり... 伊勢

あそ... 伊勢

あふ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

あそ... 伊勢

記云杜宇亦曰杜王自天而降称望帝好稼穡至

成都

高皇產靈尊ホホミテ以為哀泣カチシ即使速覲命ハヤキ以命將ミコト
上於天上ウヘニ處其神屍骸カハチ日七夜ナナヨ七ヨ以為檢樂アツヒニ
哀泣哭天上ミナモト歛竟矣ニシテ

古事紀曰天若日子死ニカリス乃於其處作喪
屋云々日八日夜八夜以遊也

あまのこはつらつらと死すをたやめしむるをあそぶといへ
るは今も此のまじり

はる秋のつらつらと死すをたやめしむるをあそぶといへ
るは今も此のまじり

螢火乱飛秋已道

秋風吹くかりまつけを
蕙花水暗螢不知夜楊柳風高鴈送秋

月令云仲秋之月鴻雁來

文選云秋風起兮白雲飛草木黃落雁南歸

此句は撰集ぬ秋初と入るり 卷之八はけい

と稱ふん之万葉集は古事紀より入るり

古事紀より入るり

古事紀より入るり

古事紀より入るり

古事紀より入るり

古事紀より入るり

古事紀より入るり

古事紀より入るり

古事紀より入るり

天保六乙未年秋九月廿一日寫之

中村萬喜直衛

